

京都大学ブータン友好プログラム第12次訪問団報告

医学部医学科2回生 森藤彬仁

2月18日から26日まで京都大学ブータン友好プログラムの一環として現地に渡航いたしましたので、ご報告いたします。

研修スケジュール

2月18日

関西国際空港に集合 機内泊

2月19日

パロ国際空港に到着 ティンプーにて GNH comission の方と会食

2月20日

National Referral Hospital 見学、ティンプー観光、在ティンプー京大関係者と会食

2月21日

国王陛下誕生日記念行事見学、BHU 見学、ワンデュポタンへ移動

2月22日

プナカ観光

2月23日

パロに移動、Paro College の学生と交流

2月24日

Paro College 構内見学、タクツァン見学

2月25日

パロ空港より帰国の途につく

2月26日

全員無事に関西国際空港へ帰国



タクツァン僧院

研修にあたって設定した目的

- ① ブータンの光と陰、両面の実情を見る
- ② ブータンの医療現場を、総合病院、BHU の両方から見学する。

1. ブータンという国

私は中学生の時、学校の図書館の新作コーナーで偶然見かけた『ブータンに魅せられて』を読んで、一生に一度はこの国に行ってみたいと思い、そして多くの日本人と同じように、「幸福の国」に対して強いあこがれを持った。それ以来私の中でブータンはある種理想郷であり続けたが、ここ 10 年で近代化にさらされつつあるブータン、特にティンプーでは必ずや歪みが生じているのではないかと考えた。私は今回の研修の中で、ブータンの素晴らしい側面を全身で感じるとともに、歪みの面にも目を向けようと思った。

2. ブータンの医療

① National Referral Hospital から

医学生として現地の医療にも関心があり、ティンプーにいらっしゃる産婦人科医師・加藤恵美子先生のご快諾で、先生の業務に同行する形で National Referral Hospital（以下ティンプー病院）の一日を見学した。ティンプー病院産婦人科には 4 人の医師が所属し、35 床の病床、分娩室 5 室を有している。

一番驚いたのは、言語の多様性であった。ティンプー病院はブータンで一番の病院であり、全国から患者が集まる。また教育レベルのまちまちであるため、ゾンカしか話せない人やネパール系の言語を話す人など、多様な言語が必要となる。そこで加藤先生と患者の間に医療事務の現地人が立ち会い、ゾンカやネパール系の言語へ通訳する光景が見られた。また、インターンドクターとして勤務しているブータン人若手医師は、スリランカで医学教育を受けたとのことで、実に 5 つもの言語・方言を話せるとのことであった。

ブータンでは医療費が無料であり、最大の病院であるティンプー病院には多くの患者が殺到すると思っていたが、実際のところは交通アクセスがあまり良くないことや患者は BHU からの紹介で来院することから、患者数は一日に 30 人から 40 人ほどであるそうだ。とはいえ、産婦人科の病床数は 40 床弱であり不足していることから、自然分娩で経過良好な者は産後 6 時間という短時間で退院していく。また、この病院では日本に比べ基準が緩さから、帝王切開の症例が非常に多く、見学の前日にはなんと 8 件もの帝王切開手術があったそうだ。また、ティンプー病院には様々な医療機器が日本の援助により導入されていて、日本の一般的な病院と比べても遜色のない洗練された雰囲気を感じた。



ティンパー病院の医療機器には JAPAN のシールが張られている



分娩室の様子

②BHU から

プナカゾンカク（県）にある **Thinlaygang BHU** を見学した。この日は国王陛下誕生日の祝日に当たり、実際の診療の見学はかなわなかったものの、わざわざ現地スタッフの方々が診療所を開けてくださり、概要の説明していただいた。

この BHU では、医師ではない 5 人のスタッフが在籍し、域内人口 5800 人に対するプライマリケアを担っている。一日に 30 人から 40 人ほどの外来があり、4 床の簡易病床と薬局も備えられている。休日には当番制で入院患者を見る。ここのスタッフは医師ではないものの、保健省が提供するプログラムを修了することで、診察、簡単な手術、処方が許されている。BHU では特に母子保健が重要視されており、普通分娩を行うこともでき、性教育の提供や避妊具の配布もされていた。



BHU の分娩台

3. ブータンの実際を見て

① ブータンの光

出会ったブータン人は敬虔な人々が多かった。寺では深い祈りをささげ、自国と幸せへの誇りを嬉しげに語る人々や憧れの景色はとても美しかった。京都と同じように景観制限が存在するとのことで、新築の物件に対しても伝統的な建築様式に似せるようにしなけれ

ばならないようだ。また、町ゆく人々の多くはゴないしキラを着用して（公式の場に行く際は着用が義務となっている）、ブータンが自国の文化を維持しようとする姿勢を垣間見た気がした。

また、よく言われることであるが、ブータン人の顔立ちは日本人のそれにとっても似ていて、また風景とともに何か癒されるような気がした。

初日の GNH committee の方との会食では、GNH に関する様々な概要を教えていただいた。経済的利益を盲目的に求めるのではなく、どんな方法であれ経済的観点からワンクッションを置いて施策を決めていくのは他国ではあまり見かけないことであり、特にシンガポールとの比較を質問した際に「ブータンはシンガポールとは確実に違った道を歩む」と自信を持って語っていたのが印象に残った。

② ブータンのかけ

ブータンは、2004 年に完全禁煙国家宣言をし、禁煙国となったとされた。しかしながら、ティンプーの街を夜間歩いていると、路上で喫煙しているブータン人をちらほら見かけた。詳しいことはわからないがインドから流通してくるそうで、理想を求めて制度化しても、それがきちんと実行されるのは難しいと感じた。またごみのモラルとしても、行く先々でポイ捨てが非常に目立ち、また実際にそれをしている人も多数見かけた。

また、近代化に伴い、多数の物資が外国から持ち込まれるようになった。もともと典型的な例は洋服だと感じた。前述のとおり、ブータンでは公的な場所での伝統衣装着用義務があるが、それ以外の場合は服装に関する制限はない。よって、引率してもらったガイドさんたちにしても、勤務後はゴ・キラではなく、普段私たちが着ているような洋服を着ていた。ここで感じたのは、外から流入してくる新しく便利なものに対抗して、伝統的な文化を維持していくことの困難であった。伝統衣装はきちんと着用するには手間がかかり、また一般的に大量生産の洋服に比べて高価である。私はこれらのことを批判する立場も意図もないが、目で見た事実から、もしも伝統衣装着用義務がなければ、ゴやキラという文化は日常の舞台から急速に消え去り、日本の和装のように「晴れ着」になってしまうのではないかと感じた。

まとめ

今回のブータン研修では、ブータンの持つたくさんのすばらしい側面を見つけるとともに、確実に生じつつある歪みも見ることができた。中には非常に驚愕したこともあったが、自分のブータンに対する愛着と憧れは依然と変わることはなく、これから何かしらの形でブータンに関わっていく機会があればと思った。

今回の派遣では日程上の都合で、タシガンなど東部地区を見学することはできなかった。坂本先生が進めているカリン診療所などでのプロジェクトにも関心があり、その現場を見ることができなかったのは心残りではあったが、国内最大の病院と一般的な BHU の両方を見学する機会を持つことができ、とても参考になった。伝統医学と西洋医学がどのように

棲み分けあるいは協力していくのかについても考えていきたい。医学部の自主研究期間や臨床実習の一環として再度ブータンに行くことも今回の派遣で生まれた夢である。

第三者的視点からみれば、ブータンの伝統文化やすばらしい自然の景観はこれからも残ってほしいと思うが、他方で我々にはブータンが発展を抑制する権利はない。さらなるグローバル化の時代が進むにつれて、これからブータン政府が GNH という観点を重視してどのように対応していくのか、注目していきたい。

謝辞

今回の派遣は、京都大学教育研究振興財団 <http://www.kyodai-zaidan.or.jp/> の助成を受けた、京都大学ブータン友好プログラムの派遣事業です。深くお礼を申し上げます。

現地の病院でお世話になった加藤恵美子先生、今回の機会を提供してくださった松沢哲郎先生をはじめとする京都大学ブータン友好プログラムに関係する方々に深くお礼申し上げます。そして、今回引率にあたってくださった坂本龍太先生には渡航前より何から何まで本当にお世話になり、格別の感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。